都市出版『外交フォーラム』NO.154（2001年5月号）掲載

【書評】

『En attendant le vote des bêtes sauvages』

アマドゥ・クルマ著　スイユ社　1998年9月

評者　片岡貞治
グローバルイシューズ（欧州・アフリカ）研究員

「野生動物の票を待ちながら」はある独裁者の生涯をモデルとした精巧な政治小説である。語り手と対話者が主人公の独裁者コヤガの生涯を物語るという口承文学の形式を取っている。この伝統的口承文学は、マリンケ語でダンソマナと呼ばれ、狩猟にまつわる物語りを対象としてきた。マリンケ族にとって、恐ろしい外敵である野生動物を倒す狩人は超越した力、即ち神秘的な魔力を有する者として畏怖される対象であった。作者のクルマはこの手法を用いて、神秘的な魔力を有する一人の恐るべき傑出した狩人＝コヤガの人生を語ったのである。

コヤガは幼少の頃より、卓越した狩人且つ戦闘士として知られていた。その戦闘能力を仏に買われ、仏軍に動員され、インドシナ戦争、アルジェリア戦争で戦勲を挙げ、遂にはクーデターにより、「湾岸共和国」の国家元首に上り詰める。コヤガにとって、政治とは戦いの場であり、統治する技術と兵法を常に兼ね備えていなければならなかった。権力を正統化するために暴力や呪術師である母の影響による魔力を行使した。

コヤガはトーゴのエヤデマ大統領がモデルである。本書には、ウフエット・ボワニ、ボカサ、セック・トゥーレ、モブツ、ボンゴなどアフリカの独裁者が仮名で随所に出てくる。クルマはこの作品によって、アフリカの独裁政権下の暴力の普遍化と権力の私物化が如何なるものであるのか、如何に欧米では理解されていないのかを独特のユーモアと政治風刺、皮肉を交えて描こうとした。

象牙海岸人であるクルマは、本国では、保険屋として知られており、現在はリヨン在住でアフリカ大陸で最も重要な作家の一人とされている。

なお、表題の「野生動物の票を待ちながら」は、クルマがトーゴに住んでいた時の家のコックが「トーゴ国民がエヤデマを拒んだとしても、野生動物たちが茂みから現れ、エヤデマに投票するであろう」とクルマに述べた発言が由来となっている。